



同窓会だより

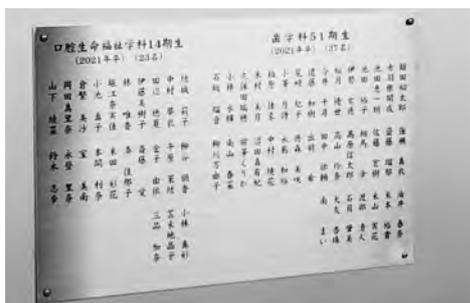
同窓会だより

副会長 野内 昭 宏

新型コロナウイルス感染症の収束もまだ先のようにも思えますが、それでも「新しい生活様式」に則って、徐々に活動の場を広げています。

1. 卒業生ネームプレート

卒業式を間近に控えた3月中旬に、この春に卒業した歯学科51期生、口腔生命福祉学科14期生のネームプレートを歯学部4階の渡り廊下に設置しました。



ネームプレート

2. 慶事

令和3年春の叙勲で、歯学科1期生の吉田元彦先生が旭日双光章を受章されました。保健衛生功労の功績が認められたことによるものです。

また、4月には以下の4人の先生が各大学の教授に就任されました。

- ・山本恒之先生（歯学科13期） 北海道大学大学院歯学研究院口腔機能解剖学教室
- ・増本一真先生（歯学科24期） 浜松医科大学歯科口腔外科学講座
- ・濃野要先生（歯学科31期） 本学口腔生命福祉学分野
- ・羽下・辻村麻衣子先生（歯学科35期） 日本

歯科大学新潟生命歯学部解剖学第二講座
そして7月には、歯学科31期の富原圭先生が、本学顎顔面口腔外科学分野教授に就任されました。

規約に則り、各先生方には当会から慶祝の品を贈呈しました。先生方の益々のご活躍をお祈りいたします。



山本恒之 先生

増本一真 先生



濃野要 先生

羽下・辻村麻衣子 先生



富原圭 先生



3. 学会開催支援金贈呈

この10月に、第155回 日本歯科保存学会秋季学術大会が、本学う蝕学分野の主管で開催されます。規約に基づき、支援金を野杵教授にお渡ししました。



支援金を受け取られる野杵教授

4. 総会と学術講演会

4月24日（土）に、この1年間の活動方針を決める総会を行いました。

その後の学術講演会では、生体組織再生工学分野の泉健次教授から「異分野連携がもたらす口腔粘膜ティッシュエンジニアリング／再生医療の発展」と題して、再生医療関係の講演がなされました。

5. 学術セミナー

5月30日（日）午前、「シンポジウム『漢方を知る』～口腔疾患における漢方医学～」と題して、遠藤奈央先生（株式会社ツムラ）、伊藤加代子先生（新潟大学医歯学総合病院口腔リハビリテーション科）、田中裕先生（新潟大学医歯学総合病院歯科麻酔科）の3先生から、ご講演をいただきました。

6. クラス代議員会議

6月19日（土）夜に、各卒業期の代表者同士の情報交換会を行いました。

学部の性格上、卒業生は全国にいらっします。そんな中で、6年間 or 4年間で共に過ごした仲間の繋がりはまた別物で強固なものです。

この会を通じて、クラスの仲間に思いを馳せて、その結びつきの重要性を再認識した方も多かったと思います。

「4. 総会と学術講演会」と「5. 学術セミナー」と「6. クラス代議員会議」は、いずれもZoomを介しての開催でした。このコロナ禍故にすっかり確立されてしまった講演様式ですが、全国津々浦々で活躍している同窓生を瞬時につなげてくれて、感覚的な距離をほぼ無くしてくれる便利なものです。

まだまだ対面事業は難しい面もありますが、ICTを駆使して工夫をして、今までと同等もしくはそれ以上の活動を考えていきます。



新潟大学歯学部同窓会学術講演会 を拝聴して

歯学科21期 棟 方 隆 一

2021年4月24日に開催されました、歯学部同窓会学術講演会に、Zoomを用いて参加いたしました。

新潟県外に住まう者としましては、今回のようなZoomによるオンライン開催は、時間的および空間的制約を受けずに参加することができます。その結果、多くの情報を享受することができ、きわめて有用でありました。

講演内容につきましては、演者ご本人が総括するでしょうから、私からは触れませんが、3部構成という形をとり、歴史的背景を含めての講演はわかりやすく、おそらく聴衆も引き込まれたのではないかと想像します。

個人的には、大学院時代に細胞培養を用いた研究をしておりましたので、接点も多く、そして苦労もわかるつもりです。先生がご指摘なさってい

る、三次元培養や共培養技術の重要性はさらに増し、先生が用いている培養系が、この分野を牽引していくものと確信しています。

先生の最終目標のひとつは、臨床応用を通して治療につなげ、患者に福音をもたらすことでしょう。そこに至るまでの学問的体系の確立も完成間近ではないでしょうか。

この分野の第一線に身を置く泉教授が発信する最新の知見に触れ、身震いする思いでございます。学術的環境の外にいる身としましては、30年ぶりにさびを落とし、そしてわずかにバージョンアップした自分があります。と同時に、教授と毎晩のように飲み歩いた日々が懐かしく思い出されます。平安閣のケーキ食べ放題も男二人で行きましたね。お互いにダイエットとは対極の位置にいたことを誇りに思っていたのではないのでしょうか。

制約の多いコロナ禍におきましても、ご講演の労をお取りくださった泉教授、そして講演会を開催してくださった同窓会本部の皆様方に、この場をお借りして深くお礼申し上げます。



シンポジウム「漢方を知る」
～口腔疾患における漢方医学～
を受講して

歯学科30期 杉田佳織

5月30日(日)オンラインでおこなわれたシンポジウム「漢方を知る」を受講させていただきました。以前から漢方医学には興味がありましたが、漢方薬は口腔乾燥症の患者さん以外処方することがなく、理解を深めたいと思い今回受講を決めました。

株式会社ツムラ営業本部の遠藤奈央先生からは「漢方薬の概念」について、口内炎などの炎症が起こっている場合、また炎症が長引き慢性化した場合に漢方医学的に考えられる原因とその治療方法を具体的に教えていただきました。今までは漢方医学というと病態を把握することが難しいものであると考えていましたが、今回教えていただいた指標の「気・血・水」は、症候から原因をとらえやすく、必要な漢方の処方構成を理解しやすいと思いました。また体の不調は生体のバランスが崩れることにより起こり、それを整えるために漢方薬が有効であるということを知ることができました。

口腔リハビリテーション科の伊藤加代子先生からは「口腔乾燥症への東洋医学的アプローチ」について、口腔乾燥症の診断や治療、味覚障害などわかりやすく教えていただきました。口腔乾燥を訴える高齢患者さんが多い診療所に勤務している私にとっては、口腔乾燥症を学び直す良い機会と

なりました。口腔乾燥症では、自律神経性・薬剤性・心因性など何が原因なのか判断することが大切で、漢方薬はほとんどの原因で利用可能であるということでした。また舌の大きさ、色、舌苔の色などは患者さんの体質をみるのに重要だということなので、私も普段の診療時に舌の状態を観察することを習慣づけていきたいと思いました。

歯科麻酔科の田中裕先生からは「漢方薬と痛みの治療」について、病名処方、歯科保険適応薬、クリニカルエビデンス、口腔顔面痛など多様な視点から教えていただきました。漢方医学では症状があれば治療ができるため、漢方薬は原因不明で診断がつかない口腔内の痛みの患者さんにも使いやすいものの、漢方処方は患者をみて証を合わせることが難しく、経験が必要なため敷居が高いと感じている方が多いというお話でした。私もやはり処方にためらうことがあったため、まず1～2種類の漢方薬を病名から処方して、雰囲気慣れてきたら証や生薬の勉強をしてはどうか、という先生のアドバイスを実践して経験を積んでいきたいと思いました。

今回のシンポジウムでは、漢方の基本的な知識から処方の仕方まで3人の先生から様々な角度で説明していただき、あらためて漢方の魅力を感じることができました。使いやすいと教えていただいた立効散、排膿散久湯、五苓散などから処方をしてみて、まずは漢方に慣れるところから始めたいと思います。

ご講演いただいた先生方、そしてセミナーの開催を企画していただいた学術委員の皆様にはこの場をお借りして御礼申し上げます。
